

1792年の島原大変によって生じた荒尾干潟（有明海）における津波堆積物

Tsunami deposits in Arao tidal flat (Ariake Bay), generated by the 1792 Shimabara Catastrophe

市原 季彦[1]; 松田 博貴[2]; 秋元 和實[3]; 下山 正一[4]

Toshihiko Ichihara[1]; Hiroki Matsuda[2]; Kazumi Akimoto[3]; Shoichi Shimoyama[4]

[1] 復建調査設計(株); [2] 熊本・理・地球科学; [3] 熊本大・理; [4] 九大・理・地球惑星

[1] Fukken Co.,LTD.; [2] Dept. Earth Sci., Fac. Sci., Kumamoto Univ.; [3] Center for Marine Environment Studies, Kumamoto Univ.; [4] Earth and Planetary Sci., Kyushu Univ

1792年5月21日に島原半島の眉山が崩壊し、有明海になだれ込んだ。その際に生じた津波によって、15000人も人的被害が生じている。これは、我が国最大級の津波災害である。

今回、対岸の荒尾干潟におけるジオスライサーによる堆積物調査を行った。同じ場所で4本のコアを抜いた。最大深度は約3.6mのコアが得られた。その大半は泥質干潟堆積物であった。その泥質干潟堆積物中に砂・貝殻片等の粗粒な碎屑物からなる3セットの薄層が見いだされた。堆積構造から、この砂層中には沖合から陸へ向かって流れた古流向が見いだされた。泥質干潟において、沖合から陸へ向かっての流れで粗粒な碎屑物が流れ込むことは、通常では考えにくい。そのため、この層は津波のようなイベント堆積物であると考えられる。C14、Pb/Csによって堆積年代を推定した結果、1792年の島原大変・肥後迷惑の津波堆積物である可能性が高いことが判明した。干潟は生物擾乱作用が大きいので、干潟堆積物中からイベント堆積物は抽出しにくい。実際、4本のコアのうち津波堆積物が見られたのは1本のみであった。

これまで島原大変の津波堆積物が発見された例はなかった。今回、得られた津波堆積物は表層から約1.3mの深度で見いだされた。今回、島原大変津波堆積物が得られたことにより、山体崩壊型津波堆積物の例を示すことができた。